二人の旅路

小柳いすず

高校二年の時、本の虫で男の子には全く興味を示さなかった私が、「お父さん、私の代わりに大学にやって欲しい人がいるの」と突然言い出したから、家は大騒動になった。私の気性を知る父なら、返事がどうであれ、問題はないはずであったが、この時ばかりは違っていた。父も娘を持つ普通の父親だった。父と母とが狼狽して勝手に筋書きをこしらえて、「それは男か？」「そいつが好きなのか？」「結婚したいと思っているのか？」と、全くあらぬ方向に尋問が始まり、挙句の果てに、

「おまえ、まさか？」

父は体を震わせて尋ねた。私はぎょっとして、頭（かぶり）を激しく振った。いかに疎（うと）い私でも、父が何を疑っているのかは瞬時に解った。私は蒼白になり、屈辱が胸に渦巻いた。大切な存在が汚され、心がずたずたに引き裂かれた。

「そいつが本当の男なら、他人に頼らずどんな苦労をしても自分で大学へ行くはずだ」

高校二年を終えようとしていた私は、生徒会の総務の任期も終えようとしていた。一学年上のKは、生徒会長の親友で、総務室に出入りをしては、雑務を黙々と手伝ってくれていた。Kの父親は肺結核で末子のKが八歳の時に亡くなったそうだ。当時の肺結核は人々に嫌われ、恐れられていたから、家の前を通る人は鼻をつまんで通ったと聞いた。Kの母はそれを悔しがって、家屋敷の処分を親戚に任せて、息子達を連れて郷里を離れた。そして当時すでに結婚して家を構えていた大牟田の長兄や小倉の姉の所に身を寄せたので、Kは大牟田や小倉を転々としたという。

Kは、会長と同じく就職クラスにいたが、英語が得意で、模擬試験だけは進学生と一緒に挑戦していたらしい。会長の話ではKが成績上位者の中に名を連ねることも少なくなかったという。

Kはなかなか就職が決まらなかったが、卒業前にようやく市内の食品会社に就職が決まった。社会人への晴れの門出ではあったのだが、将来なんとしても大学に行って欲しかったし、本人もそれを願っていた。卒業していくKに言った。

「何年先になってもいいから、体力と経済力が許せば、大学に行ってね」

父に大学にやって欲しい人がいると頼んだことも、そのため誤解されてしまった事

も、Kには何も話さなかった。汚された悲しみと屈辱感に堪えかねて、男女交際そのものが穢れて感じられ、Kの存在さえ忘れたかった。

「Kさんが卒業されたら、交際は終わりにしたいの。身勝手だけど許してね」

私の様子がただ事ではなかったのだろう、一方的な私の言葉にKは「うん」と堅く頷き、二人の交際は終止符を打った。とは言え、二人の関係は、お付き合いとか、男女交際と呼ぶようなものには至っていなかった。殆んどが総務室で、学校行事のプログラム等の作成作業が一段落付いた時に、Kの身の上話を聞いたり、英語を教えて貰った程度のことだった。問題になったあの日は、たまたま私が総務室に置き忘れた筆入れをKが家まで届けてくれ、ちょうど見て貰いたい参考書があると、私の部屋まで上がって貰ったのだ。誤解された時、

「そんな関係ではないのよ。手も触ったことないし……。幾代伯母ちゃん（母の姉）とこの書生さんみたいに、大学にやって欲しいと思っただけ」

何故そう言えなかったのだろう。好きだとか、結婚などと言う、私がまだ考えたこともない、心の奥底にある願望を父が引きだしてしまったからであろうか。

折しも、石炭業は斜陽産業となり、父の会社が倒産の危機に瀕した。そんな中でも国立ならばなんとかなるだろうと言ってもらい、痛手から逃れるように、受験勉強に没頭した。翌春、念願の大学に合格して、奈良に出た。すでに我が家は、仕送りを頼めるような状況ではなく、アルバイトで生計を立てることを決心した。ところが、大学の事務局は、一年生には勉学に励んで欲しいと、アルバイトの斡旋には消極的だった。また奨学金を申請したが、前年度の収入が多く、対象にはならなかった。そのため、住み込みの家庭教師の口を学内の掲示版で見つけた時には、飛び上がらんばかりに喜び、二か月足らずの寮生活に終止符を打った。

胸を弾ませて移り住んだ家庭教師先の家は、市内に土産物店を出していた。ご夫妻の帰宅は夜中近くで、家には留守を守り家事を任されたおばあちゃんと二人の小学生が残された。子どもたちの環境のため、住み込みの家庭教師を置きたいとの意向だった。

ところが、苦労知らずの私は、不甲斐なくもわずか三カ月でそこを飛び出すはめになってしまった。「姉ちゃんは、僕らのお陰でご飯が食べられるんやで、儲(もう)かってんなあ」とか「姉ちゃんは自分の勉強ばかりしてずるいわ」などの、小学二年生の男の子

の言葉に我慢がならずに逃げ出してしまったのである。

寮で同室だった正子先輩の紹介で、奈良の街はずれに間借りを始めた私は、魚が水を得たように、元気になった。そこは、一面の青田が広がっていて、胸の中を緑の風が吹き抜けるような爽快感があった。

正子先輩は、岐阜出身の二年先輩で国文学が専攻だった。時には、ともに若草山に登った。若草山は、山とは名ばかりの、こんもりと円い芝生の丘で、背後にある濃い青緑の春日原生林とのコントラストが美しかった。頂上からは、奈良盆地を一望できた。正子先輩と芝生に腰を下ろし、先輩が万葉集を解説してくれると、古き時代にタイムスリップしたかのようなトキメキを覚えたものだった。

当時は、アルバイトを終え、下宿に戻ると疲れて早々に寝てしまったため、勉強するのは深夜から明け方までのことが多かった。勉強机の横の窓には、漆黒（しっこく）の夜の帳（とばり）が降りていた。私は、漆黒の闇から濃紺に移る瞬間が大好きだった。次第に濃紺から青色に変わり、ライトブルーの空が広がると、「さぁ、今日が始まる」と心が躍った。

しかし、アルバイトのない時は生活が厳しかった。それでも、学内の売店で昼休みにパンを販売する手伝いをすると、一日八十円貰えた。当時菓子パンが一個十円だったから、毎日二個買った。残金の中から、岩波文庫の一つ星の本を毎日一冊購入するのが何よりの楽しみだった。「伊豆の踊子」、「野菊の墓」、「羅生門」、「ソクラテスの弁明」等々、書店には一つ星がそれこそ星の数ほど並んでいて幸せだった。二つ星、三つ星の本は、アルバイトがあった時に購入しようと、楽しみにしていた。残りの二十円は、ある日には玉子ともやしに、またある日にはメザシとほうれん草に化けた。いつも空腹だったが、魂の方が飢えていたのか、むしろ喜びの方が大きかった。

とは言え、大切な存在を汚されてしまった屈辱とKと別れた痛手は癒えなかった。誰が名づけたか、私のあだ名はニヒルだった。

一学年が終わり、帰省する列車の中で、何とKの姿を見かけた。胸の中を熱いものが駆け巡った。長い脚を持て余したように、通路まで投げ出し、世を拗ねた表情で腕組みしていた。あまりの変わりように、直視できなかった。私は家に帰り着くや、速達を出した。その住所にまだKがいるかどうかも定かではなかったが。

「私のせいで、あなたを変えてしまって御免なさい。許してください」と。

しばらくして届いたKからの手紙は、先日のイメージとは別人の、以前のままのK

だった。そのはずである。車中の人はKではなかったのだ。あまりにそっくりだったので、今でも信じられない。

Kからの手紙は、以前の几帳面な文字で、飛び上がらんばかりに嬉しい内容だった。

「このたび、二年間勤めた職場を辞め、東京に出て、新聞店に住み込みで働きながら予備校に通い、大学受験を目指します」とあった。ついては、私との交際を認めて欲しいとの父宛ての手紙も添えられていた。父はしばらく唸っていた。

「受験勉強に専念している者でさえ、合格は厳しいのに、一度社会に出た人間が、働きながら受験を目指すことは生易しいことではないよ。でも彼は本気のようだ。お前が役に立つのなら応援してあげなさい。しかし、恋愛はだめだ」

そして、私たちの文通が始まった。

しかし、父が案じたように、Kにとって現実は非常に過酷なものだった。

新聞店の仕事は三時起きで、仕分けをし、朝刊を配り終えると、朝食までの僅かの時間と、朝食後の少しの自由時間があるだけで、昼間の空いた時間は大半が集金や拡張に費やされた。午後の三時からは夕刊の仕分けと配達。夜の集金や拡張もあり、予備校に行く時間を持てた時には、すでにくたくたで睡魔が襲い、つい電車の中で寝込んでしまい、「終電ですよ」と車掌に起こされたことも一度や二度ではなかったそうだ。予備校に行きそびれたまま戻らなくてはならぬ悔しさに、深夜の道々、自分への憤りを噛みしめたとKは手紙に綴っていた。

翌年の大学入試に失敗し、風邪をこじらせたKは、東京での受験勉強を断念し、九州に戻った。小倉の姉の所に居候させてもらい、朝は新聞配達をし、姉から作って貰った弁当を持って終日図書館で独学した。予備校に行く費用のなかったKは、夜は、ラジオの旺文社大学受験講座が頼りだった。やがて、同講座の月一度の添削問題で、志望校の合否判定に〇が付くようになった。

翌春、Kは同級生より四年遅れて国立の大学に合格した。すでに大学四年生になろうとしていた私のもとに、「メデタイニゴウカクス、ミンナキミノオカゲ」との電報が届いた。めでたくタイ語学科に合格したとの知らせだった。有り難い、嬉しい電報に涙した。

Kは生活をアルバイトで支えていたが、奨学生でもあったので、外大での新しい語学の習得に没頭できた。一方、私も奨学金を受けるようになっており、授業料も減免になったおかげで、家庭教師だけで生活が立つようになっていた。最終学年は卒論に

取り組みながら、教職に就くための教育実習などもあった。

翌年大学を卒業した私は、父の勧めもあり、本籍地の大分県で教職に就いた。

赴任先の県立高校では、生徒達が初めから新任教師の私に心を開いたわけではなかったが、連日の悪戯（いたずら）という試験に合格したのか、生徒達は私の授業に熱心に耳を傾けてくれるようになった。

一方Kは、タイ国に合弁会社を設立する某企業が、即戦力が必要なので年齢は不問とのことで、就職が早々に決まった。卒業すれば、即、海外赴任も考えられたため、Kの卒業を待たずに結婚することを父母ともに了承した。生徒達との早すぎる別れは残念ではあったが、二人の旅路はすでに九年目を迎えようとしており、長すぎた春に終止符を打った。

そして、新たな二人の旅路が始まった。今度は二人三脚で。勿論、私の苗字もKとなった。

タイ国との合弁会社設立の計画は頓挫したが、工場に積み込まれる木材やチップを運んで来る外国船との折衝に当たる夫は元気になった。私は毎日数人の生徒を対象とした小さな塾を開いた。しかし、塾が充実するにつれ、思い出されるのは、学生時代の家庭教師先の男の子のこと。真っすぐに育っただろうか？　彼のおかげで、私は良い教師になりたいという願いと根性を持てた。五十年経った今でも彼のことは忘れられない。そうだ、いつか訪ねて詫びとお礼を言いたい。もう彼は還暦近くになっているはず。商才にも長（た）けて、立派なお父さん、いやお祖父ちゃんになっているかも知れない。いずれにしても、この目で確かめたい。今は大人同士だ。言いたいことも言い合える。

夫との二人三脚は、歩みこそ遅くなったものの今も続いている。今年は夫が、来年は私が古希を迎える。奈良の男の子へのわだかまりを夫に語ったら、古希の記念に二人の青春の地・奈良を訪れようと提案してくれた。

「その後のことを彼が語ってくれたら、お前の心残りも解決できるかもね」

そう語る夫の笑顔に、私は早や胸を弾ませている。